高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.14

高知県立文学館

●「鐘の音（大豊町豊永定福寺）」（写真提供／横田鉄喜）

リレー随筆⑭　土佐漢詩紀行 ―― 石川　忠久

六月二十九日㈮、十二時半、高知空港着。NHK高知支局の人が出迎えに来ていて、そのまま車で支局へ。昼食もそこそこにディレクターと打ち合わせ、すぐ本番。今日の夕刻放映する「ようこそ土佐へ」の番組の録画取りだ。

この度の高知訪問は、高知女子大学の成田十次郎学長のお世話で、高知県立文学館と漢字文化振興会との共催により、講演会をすることになったためである。それに合わせて、「ようこそ土佐へ」への出演となった。

高知支局の若い女性ディレクターは、なかなかやり手である。事前の電話でのやり取りの時、私が〝漢詩人〟を称しているのを知って、放送で自作の漢詩を披露すること、その際坂本龍馬を必ず詠みこむこと、との注文。

注文に応じて、何とか左のような詩を作り、色紙に書いて当日持参、早速放映に及んだ次第である。

詠土佐　　土佐を詠ず

維新英傑世無双　　維新の英傑 世に双び無し
椽筆詩僧鼎可扛　　椽筆の詩僧 鼎 扛ぐべし
今古汪洋浩然気　　今古汪洋たり 浩然の気
彬彬文質海南邦　　彬々たる文質 海南の邦

維新に活躍した坂本龍馬は、並ぶ者のない英雄である。

また、大詩人義堂や絶海は、鼎を持ち上げるような大きな功績をのこした。

このように、古今にわたって天地の精気が漲り、

文と質とがよく調和している、輝かしい国、それはこの海南の土佐だ。

注文通り、第一句にまず龍馬を詠じ、第二句に土佐の生んだ二大詩僧の義堂周信と絶海中津を詠じた。「椽筆」とは、椽のような大きな筆をふるう、大文学を著すこと、をいう。

土佐は、一方において龍馬のような英雄を生み、一方において義堂、絶海のような詩僧を生んだ。まことに、『論語』に言う、「文質彬彬（物の生地と上を飾る彩とがよく調和している）」の語に当てはまる土地である。

翌三十日、午前中、高知城を案内していただいたあと、午後の高知城ホールでの講演会に臨む。満員の盛況の中、私は、義堂・絶海のほか、谷秦山、山内容堂、幸徳秋水と、土佐出身の詩人の作について話をした。

講演終了後、文学館の橋田憲明館長に請われて、今度は次のような腰折れを作った。

高知城偶成　　高知城偶成

此地成城四百秋　　此の地城を成く四百秋
叢叢多士紹清流　　叢々たる多士 清流を紹ぐ
登来一望何雄偉　　登来一望何ぞ雄偉なる
豈管仲宣千古愁　　豈に管せんや 仲宣千古の愁

第四句は、絶海の詩の句「寫がんと欲す　仲宣千古の愁」をもじったもの。昔、王仲宣は楼に登って愁に沈んだが、この高知城の眺めは「愁」など全く関係ない、素晴らしい姿だ、というつもり。

このあと、新しい龍馬記念館も訪れたのだが、紙数が尽きた。

（二松学舎大学学長）

◆次回企画展によせて◆

2001年11月22日(木)～2002年1月6日(日)

山内一豊入国400年共同企画

「おあん、婉、お馬…土佐の近世の女性と文学」

「おあん物語」あるいは「於安女咄（おあんじょばなし）」として江戸中期から今日まで語り伝えられ読み継がれてきた話があります。

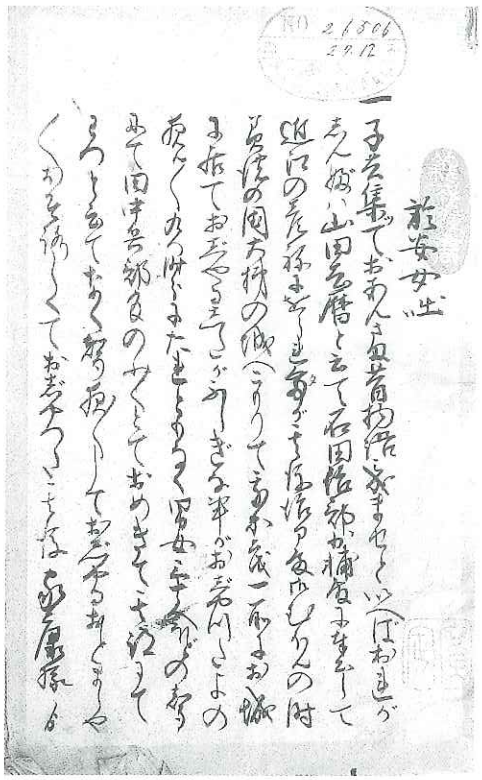
「おあんさま」と呼ばれた女性（以後「おあん」と表記）は、土佐の生まれではありませんが、戦国時代末期、今の滋賀県彦根市付近で成長し、おそらく二十歳になるかならないかの頃、父親や母親等とともに土佐に移り住み、そして結婚をし、土佐で亡くなった武家の女性です。

「天下分け目の戦い」と言われた関ヶ原合戦は慶長五年（一六〇〇）九月十五日の関ヶ原での決戦が有名ですが、そこから約十キロほど東方の大垣城では、それ以前の八月にも、また九月十五日以後も激しい籠城戦が展開されました。

石田三成の家臣であった山田去暦の娘おあんは両親や弟や他の家族などと共に、その大垣城に籠もり鉄砲の玉を鋳造したり、男たちが取ってきた敵方の首に名札を付けおはぐろを付けたりと、持ち分の女の仕事をこなします。

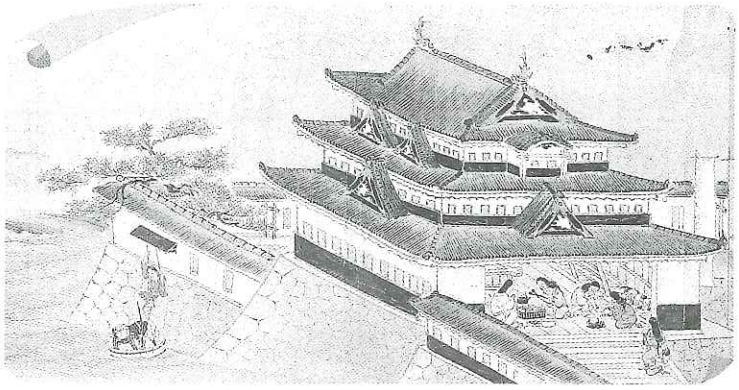
「…首もこわい物ではおりない。その首どもの血くさい中に寝たことでおじゃった。」敵の首級を挙げることが唯一武士たる男子の戦功の証であった時代、妻や娘たちもまた夫や父を支えたのでした。今日のモラルでは計り得ないその時代時代の精一杯の生き方があったことを思い知らされます。

いよいよ明日は落城かと、おあんたちも死を覚悟した頃、父宛てに届いた一通の矢文に救われ、おあんらは城を脱出、大垣北西の青野の方へ逃げ助かります。



森家本「於安女咄」（県立図書館蔵）

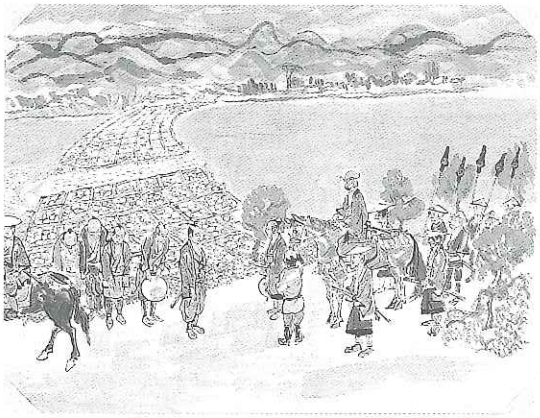
その母親は、その途中で出産もします。その後、縁あって山内氏に召し抱えられ、おあんもまた、はるばる土佐までやって来たわけですが、いつどのようなルートで来、どこに住んだのでしょう。話ではその後雨森儀右衛門に嫁ぎ夫に先立たれた後は、子供が無かったので、晩年は甥に養われながら、甥の子どもや近所の子どもたちに大垣籠城のことや、慎ましく暮らした彦根時代のことを繰り返し語り聞かせたようです。



「おあん物語絵巻」益田勝実氏蔵

もうだいぶ前、県外でのことですが、高校国語の教科書に「おあん物語」が載っていました。今回企画に際し、県内の国語教科書をすべて目を通したのですが（目次のみ）、残念ながら一つの教科書にも採り上げられていませんでした。しかし、寺石正路氏や吉野忠氏や岡林清水氏の研究に、そして桑山俊彦氏の紹介によって「おあん物語絵巻」に出会えたことは幸いでした。

江戸中期以降に版本として普及し、多くの読者を得た「おあん物語」が、やがて絵巻を生んだのか、版行以前に写本として流布してゆく過程で絵師の創作熱を駆り立てたものか、絵師も絵巻の成立事情も原所蔵者もわかりません。しかしながら「生きる」ことの非情さと、「戦」における人間心理を如実に語った「おあん物語」に心打たれた多くの読者聴者がい



大野龍夫画「兼山公絵伝」より（県立歴史民俗資料館蔵）

てこそ編み出されたものなのでしょう。それぞれに特色があり、微妙な差異が見られます。

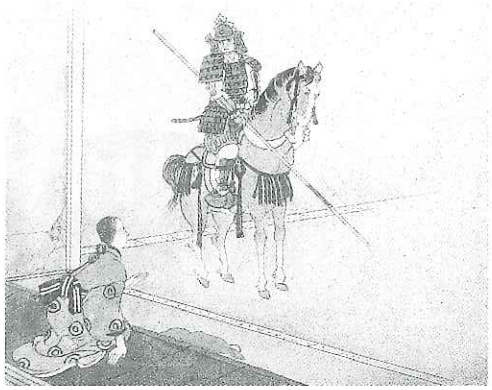
また大垣を中心とした「関ヶ原合戦図」は、赤坂の家康本陣や「寄せ手の大将」田中兵部（吉政）、そして「山内対馬守（一豊）」の位置関係なども描かれていて、興味深いものがあります。

さて、野中婉は土佐藩奉行職　野中兼山の娘としてあまりにも有名です。後世の想像画とはいえ曾祖母（兼山の祖母）慈仙院や祖母（兼山の母）秋田夫人や父兼山は肖像画が遺されているのに、野中婉の肖像画は遺されていないことが今回の企画展示に際し残念に思ったことです。

婉の曾祖母　慈仙院

婉の祖母（兼山の母）秋田夫人

寛文元年（一六六一）と言えば、兼山失脚の二年前ですが、兼山の四女婉が、この文学館の建っている土地、かつての野中屋敷で生まれた年でもあります。この年は、室戸津呂港が竣工、また忠義・忠豊を自邸に迎え饗宴も開くという野中家得意絶頂の時でもありました。



『節婦の鑑　山内一豊夫人伝記』より

だが、二年後の夏には、兼山弾劾、十二月兼山死去と悲しみの中、一六六四年三月野中家は改易され、婉ら遺族もまた追罰を受け宿毛に幽閉されます。一七〇三年秋の赦免で、約四十年の幽囚を解かれ時を経て朝倉に移り住んだ後、婉もまた、かつての野中屋敷を見つめたはずです。四十歳を過ぎて初めて自由を得、再び生き始めた婉の心の支えとなったものは何だったのでしょう。偉大な父兼山の娘としての誇り、谷秦山の存在、文学・学問への熱い思いも抜きには語れないでしょう。改めて野中婉の書や歌や漢詩を鑑賞していただきたいと思います。かつて、恋文か、とも話題になった谷秦山宛野中婉書簡も、谷秦山書簡とともに所蔵者のご厚意により初公開いたします。

「坊さんかんざし」人形や「よさこい節」で土佐を全国に紹介した「純信お馬」のお馬さんは、実らなかった恋ですが、土佐らしい明るさがあります。奥物部の笹口番所付近から無事国抜けをした二人でしたが讃岐の金比羅さん近くの宿で土佐からの追手に捕まり、その後二人は別々の人生を歩むことになります。

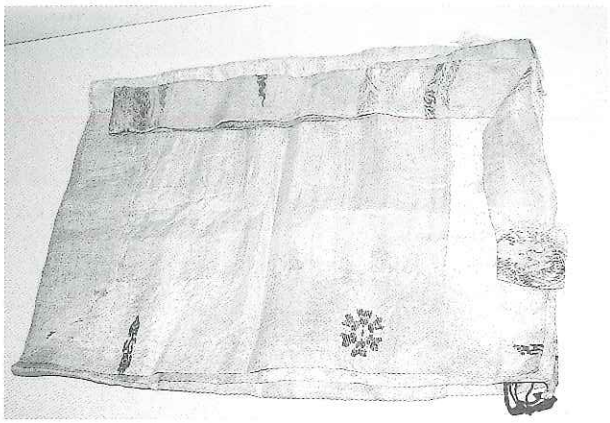
取り調べの役人に「私は純信さんが好きでした」と、はっきり言ったというお馬さん。五台山長江には「お馬生家の化粧井戸」も遺されていますし、東京北区の西福寺には、「お馬塚」の碑も建てられています。自分の気持ちを大事にした近代女性の先駆けだったかもしれません。安政二年（一八五五）の、この二人の脱出行が、志ある土佐の若者たちに与えた影響・感化は決して小さくはなかったでしょう。

このたびの企画展開催に際し、僧純信の袈裟や自筆経文や茶碗などが篤志家のご好意によってご紹介できるのも有り難いことです。追放されて後、愛媛県の川之江で寺子屋の師匠をしたり、各地を放浪したとも伝わる純信さん。その名誉回復のために尽力された、須崎市の今は亡き矢野安民さんの執念がこれらの純信遺品を招き寄せたとも思われます。

「土佐の近世の女性と文学」―その範疇はまだまだ際限なくあります。山内一豊夫人や武藤細鸞ら女流画家たち、そして商家や農村の女性たち。

どこまでご紹介できるのか、心許ないところもありますが、ご期待に背かぬよう、なんとか開展にこぎ着けたいと思っています。皆様方のご来場を心よりお待ちしています。

（別役佳代）



僧　純信着用の袈裟（里見剛氏保管）

関連行事

■12月9日（日）記念講演会　入場無料

10:00～12:30、於・文学館1Fホール、定員120名

「おあん物語とその給巻の魅力」

早稲田大学教授　**桑山俊彦**氏

「野中婉、その誇り高き半生」

土佐史談会副会長　**依光貫之**氏

参加申込：〒住所・氏名・TELをご記入の上、県立文学館12／9講演係までハガキで、または館受付でお申し込み下さい。入場整理券をお送りします。定員に達したら締切ります。

学芸員メモ

土佐のむかしばなしと伝説展

平成13年7月1日から8月31日まで、高知県立文学館において、土佐の昔話や伝説などをとりあげた企画展を開催した。これまでの文学館のイメージを変化させることができれば、という思いも込めつつ、夏休みの小中学生にも楽しんでもらえる展示を目指した。作家や作品をとりあげていないため、文学館にしてはやや特殊な展示になっていると思うので、今後の参考までにこの企画展の開幕までと、おもな内容、閉幕にいたるまでの流れを振り返ってみたい。

■展示資料について

昔話は、言うまでもなく形がない。原稿用紙に綴られてもいないし、作者も不明である。語られる場と、語り手、聞き手をすべて含めて、はじめて本当の意味で完成される。本当なら一番展示にふさわしいのは、語りの場を再現することかもしれない。

土佐には現役の昔話の語り手はほとんど残っていないと言われるなか、鏡村の下本国重さんには、土佐らしい世間話や笑い話を語っていただき、会場の入り口で語りのビデオを流すことができた。

第1会場（1階ホール）と第2会場（2階企画展示室）のおおまかな構成については、以下のとおりだった。

第1会場については、「土佐民話の会」の市原麟一郎さんの構成により、土佐の民間信仰をとりあげた。「土佐の地蔵さんめぐり」と「弘法伝説・土佐霊場めぐり」の2つを、市原麟一郎さんの文章、写真や地図などで紹介した。

民話おもちゃであそぶ子どもたち

第2会場では、昔話を山、里、水辺と分けて、それぞれに残る昔話と伝説をとりあげた。展示したのは、昔話を生々しく感じてもらえるように、昔話に出てくる民具や、伝説の残る場所の写真、ゆかりの資料などである。

さらに、語られた昔話が、文字となって読まれ、広く一般にも知られるようになるまでのおおまかな流れをたどるために、「文字になった昔話」コーナーとして、奈良絵本や御伽文庫などの近世資料から、昔話に取材した文学作品などを展示した。

この中で、特筆すべき資料は、高知市内のお宅に所蔵されていた冊子本である。タイトルも作者も不明だったので仮の名称を『土佐化物絵本』とさせていただいた。土佐の各地の奇談や妖怪の話などの短い話が、上下巻と考えられる2冊の本に、ユニークな絵とともに載せられている。現在まで残っている話もあれば、いまはすでに伝えられていない話もある。書かれたのは幕末から明治初期頃と考えられる。民間伝承を書き残したものとしてはたいへん興味深い資料である。

今回はそういった資料展示のほかに、子どもでも昔話のもつ魅力的な世界にひたってもらえるような方法を模索していたところ、偶然新潟県立歴史博物館で「越後・佐渡の民話」という企画展が開催されていることと、その中で、埼玉県のおもちゃ作家・樋上潔さんによる「民話おもちゃ」なるものが展示されたことを知り、当館でもこの民話おもちゃを展示していただくことになった。

これは、手作りの木のおもちゃで、「かちかちやま」や「うりひめ」など、おなじみの昔話をテーマにしたもの。実際に手でふれて遊んでもらうことができる。もともとは「雪国の民話」というテーマで作られた作品だったが、今回は、すでに樋上さんが作製されていたおもちゃの中から、土佐にも共通した昔話がある9点をえらび、展示していただいた。さらに、高知の展示用として、土佐の代表的な昔話「エンコウの傷薬」を新たに作製してくださった。愛嬌のある丸顔のエンコウが切られた腕を取り返すために頑張るおもちゃで、会場の人気者になっていた。

樋上さんのおもちゃには、人形作家・山本光子さんによる人形も一緒に展示された。やわらかい手触りの、愛らしい人形たちが、会場の雰囲気をとてもなごやかなものにしてくれていた。

■関連イベントについて

期間中は、定期的に2つの催し物を行った。

一つは、ほぼ10日間に一度のペースで開催した「かみしばい劇場&むかしあそび体験」。市原麟一郎さんによる紙芝居と、「高知子どものあそび研究会」のみなさんの指導による昔遊びがその内容である。小学生くらいの子どもたちから、小学校に入る前くらいの子どもたちまで、たくさんの子どもたちが親子で参加してくれた。

紙芝居は、市原さんのゆたかな土佐弁で語られ、テレビ世代のはずの子どもたちも目を輝かせて引き込まれていた。昔遊びのほうでは、おじゃみ、けん玉、竹馬などの昔懐かしい遊びを体験した。昔遊びには担当者自身も少しだけ参加してみたが、コマが回せずに小学生の男の子に叱られながら教えてもらったり、あやとりの糸をもつれさせて参加者のおばあちゃんに笑われたりしながらも、思わず熱中してしまう楽しい体験だった。

かみしばい劇場

もう一つは、期間中3回に分けて行ったスライド上映会「土佐の地蔵さんめぐり」だった。こちらは中高年の参加者が多かった。県下各地のお地蔵さんの写真と解説、お地蔵さんにまつわるエピソードや、お地蔵さんの民話紙芝居などをスライドで上映。身近なお地蔵さんの、知られざる意外なご利益などを知ることができ、参加者も興味深そうに聞き入っていた。

■会場デザイン等について

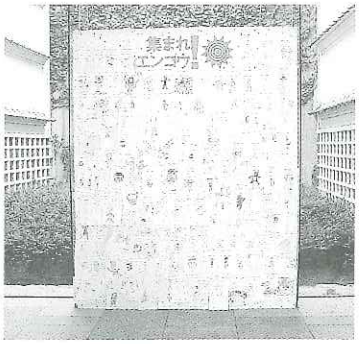
ポスター、図録、看板類、展示会場内のデザインは、すべてデザイナーの織田信生氏に依頼した。なかでも会場デザインについては、普段はあまり意識していなかったが、今回、デザイナーの目で見てもらい、意見を聞いて、はじめて「見せ方の工夫」を強く意識した。

とくに、第2会場の「機織り淵」という伝説の紹介コーナーでは、立体的な展示の方向性を見た気がした。機織り淵伝説というのは、県山間部に多く残る伝説である。美しい娘が、蛇に魅入られる、もしくは、親の悪事の罪を受けて蛇の体になってしまい、水の底に消える。娘をさがして淵の底にもぐった人、もしくは、たまたま落とした物を拾いもぐった人が、水底で娘が機を織っているのに出会う。人間の世界に帰ろうと誘うが、娘は、自分はもう蛇の身になってしまったから帰れないといい、そこにとどまった

第1会場展示風景

という話である。

どこか幻想的な趣のこの伝説を紹介するとき、「展示資料」としては伝説の残る淵の写真を解説パネルとともに置き、関連資料として、機織り機を展示した。ほかに展示できる資料はなく、これで精一杯かと思われたが、デザイナーの目で見ると物足りないものだったようだ。織田氏の提案で、機の周囲に青い布を張り、その上の照明には青いフィルムを張り、衝立を立て、水の底をあらわす小部屋のようなコーナーを作った。さらに、深い水の中でただよっているような、水音の入った音楽まで作って来てもらい、そのコーナーに響かせた。それだけでも驚いている私たちを尻目に、織田氏はトイレットペーパーを持って来て、それを黙々と細く裂いては、天井から蜘蛛の糸のように何百本もつりさげてみせた。出来上がったのはまるで今にも勝手に機が動き出しそうな静かな水底の世界だった。



■子ども向けの展示

民話おもちゃであそんでもらいたいのはもちろんだが、小学生にも展示も興味を持って見てもらえればと、「とんとむかし　はてな帳」というものも作製してみた。小学校高学年を対象とした、昔話クイズになっており、県内の小学校に配布をお願いした。展示をみていけば解答がわかるように、通常の解説パネルのほかに小学生用のパネルも作り、マークをつけて、展示を回ってクイズを解けるようにした。「はてな帳」の最後には、「エンコウの絵を描いてみよう」という空白を作って、そこに各自好きなようにエンコウの想像図を描いてもらい、玄関前の大きなボードに次々に張っていった。あっという間にボードがいっぱいになり、すぐに張る場所がなくなった。

■さいごに

今回の企画展のすべては、力を貸してくださったたくさんの方々によるものである。

樋上潔さんの民話おもちゃ、山本光子さんの人形なくしてはがらんと寂しいものになったに違いない。縁の下の力持ちに徹してくれた織田信生さんには何かとお尻を叩いてもらった。お地蔵さまの写真を撮影してくださった「上佐民話の会」会員の渡辺裕二さんや、解説パネルに切り絵を添えてくださった丸林友文さんのおかげで1階の展示が楽しく仕上がった。県立歴史民俗資料館の皆さんにも泣きついてはご迷惑をかけた。

名前をあげればきりがないが、何より、「土佐民話の会」の市原麟一郎先生なくしては、この企画展の実現はありえなかった。数え切れない無理難題もにこにこしながら聞いてくださり感謝に堪えない。何より民話を愛する気持ちの深さと、県内のあらゆる小道も歩いて民話を集めている真摯な姿には、様々なことを教わった。

この場を借りて、展示に協力してくださった皆様と、期間中会場に足を運んでくださった来場者の皆様に、心からお礼申し上げます。（学芸員　野中佐知子）

閲覧室から

小説　牧野富太郎『草を褥に』

大原　富枝著

自らを「植物の精」と呼び、「植物界の巨人」と称される、植物分類学者牧野富太郎。

本著は、この作品が絶筆となった作者により、牧野富太郎と妻寿衛子の書簡を通して、学問一途の人物の心中が、同郷者の鋭敏な感覚で探られている。

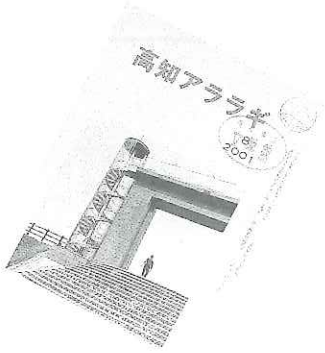
富太郎のうちに持つ、植物学への底知れない博識をはぐくんだ執着力、探求心の根源にある、土佐の男のもつ独特の「いごっそう」気質が独自の筆で語られている。

学者としては尊敬すべき力量を備えてはいるが、金銭感覚は皆無といっていい富太郎。妻子の苦労を察する感覚をまったく持たない主人公を、支えつづけた寿衛子のすさまじい奮闘の生涯が、色濃く浮き上がっている印象深い作品である。

小学館　定価1890円（本体1800円）

県内同人誌紹介

『高知アララギ』



昭和三六年三月安芸市にて三宮幸十郎、吉田敏之、須賀正俊、楠瀬兵五郎らにより創刊されたアララギ系月刊短歌誌。

出詠者一五〇名―一六〇名。小暮政次亡き後楠瀬兵五郎、藤田信宏が選に当たりその作品が主。「茂吉短歌鑑賞」は最晩年の「つきかげ」より溯り毎月掲載し現在「遍歴」。この二つを柱に作品評歌集評を連載して作品の向上を図っている。主要同人の歌集刊行も次々行いその歌集批評特集を組んで来た。三月号楠瀬兵五郎の「海紅集」十月号松本智恵の「森陰の店」（双書11）の批評特集で充実した。又会員のエッセイも毎月。それに井上佳香、小松桂子等若い抒情が成長。

中央短歌総合誌に於いても「地方誌の標準を超している」と評された。毎月四十四、五頁。定価七五〇円。（楠瀬兵五郎）

発行人　楠瀬兵五郎　編集　野口光彦

発行所　香美郡土佐山田町北本町一―二四四―五　楠瀬方

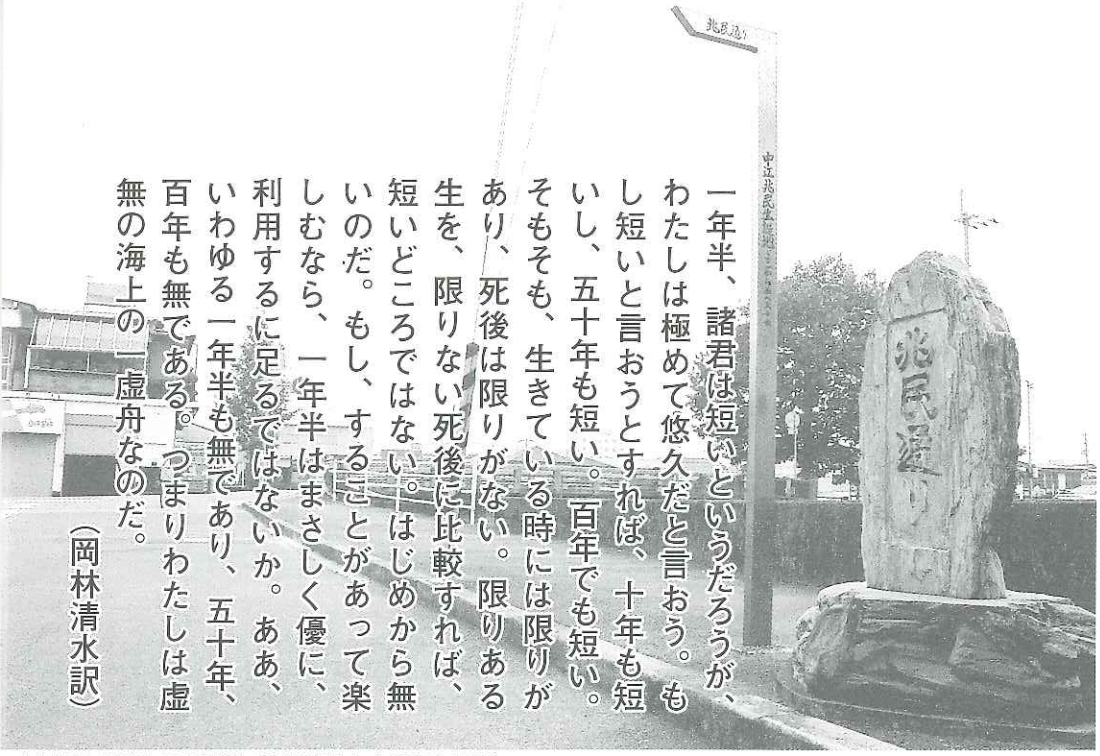
電0887―53―5435

土佐文学さんぽ 12

中江　篤介

『一年有半』（博文館）

一年半は悠久である



一年半、諸君は短いというだろうが、わたしは極めて悠久だと言おう。もし短いと言おうとすれば、十年も短いし、五十年も短い。百年でも短い。そもそも、生きている時には限りがあり、死後は限りがない。限りある生を、限りない死後に比較すれば、短いどころではない。はじめから無いのだ。もし、することがあって楽しむなら、一年半はまさしく優に、利用するに足るではないか。ああ、いわゆる一年半も無であり、五十年、百年も無である。つまりわたしは虚無の海上の一虚舟なのだ。

（岡林清水訳）

兆民通りの碑とその界隈（高知市はりまや町３丁目）

中江兆民（一八四七～一九〇一・現高知市はりまや町三丁目生）の『一年有半』（一九〇一年九月二日発行）は明治期空前のベストセラーとなった。初版一万部は三日にして売り切れ、たちまち二版、三版と版を重ね、その勢いで翌年九月まで二三版、二〇万部が売れたと伝えられている。

死に至る扉を開けられた者（兆民は喉頭癌のため余命一年半と宣告されていた）の著書という特異性、当事者が兆民という人生的吟味の対象としては横綱格であるという話題性。ベストセラーの条件が揃っていたともいえるが、力をふりしぼって生きた者への畏敬、大いなる共感のもたらしたものもあったろう。内容に於いても読者を魅きつけるに十分なものがあった。

時の政官界への一刀両断の書きぶり、義太夫、俗曲俚歌、落語等への造詣の深さ、人物論、産業論、国家論や暗殺論、芸妓解放論はては豚の理想的な飼い方まで総計百九十編（内二十三編は既発表分）にわたる内容の多彩さ。概して政官界には厳しく、古典芸能、相撲等趣味の領域はベタ誉めである（世俗につかった兆民の意外な一面だ）。

執筆状況は最悪であった。首の腫れ物は日増しに大きくなり、呼吸も満足にできなかった。東京の自宅（執筆当時は堺の寓居）から、借金取りや差し押さえ通知が来たなどという知らせが一日か二日おきに舞い込んできた。が病いの身体からつかみ出した言葉は去り行く者のか細い声とはほど遠く、時にユーモラスに富み、歯に衣きせない筆致は冴えた。文の基調に、兆民の核たる〝主権在民〟の思想が波打っているからであろう。出版後、「詩として誦すれば、韻脚無きの詩なり。哲学として読めば、組織なきの哲学なり。其文情翔舞―」（中央新聞）と評された。

百年を経た今でも、有効的な言葉がひんぴんと出てくる。

＜――その官吏にあっても、局長になれば安んじ、国の大臣ともなればますます安んじ、その権威によりかかって事を行い、以て君恩に報じ、民意にそって盛名をなすことなど考えず――（官吏の安心）＞

＜貿易の順境と逆境、金融のゆるみ、工業商業の不振か否かなどは哲学と何の関係もないようであるが、そもそもこの国に哲学がないのはあたかも床の間に掛け物がないようなもの――（日本に哲学なし）＞

時には読む側が粛然となる描写もある。

＜この夕方、わたしは笑って妻にいった。お前は年がすでに四十あまりで、わたしが死んだあと、また再婚の望みはない。わたしと一緒に水にとびこんですぐに事なき場所へ行こうか、どうかと。二人は笑い合い、途中でかぼちゃ一個とあんず一籠を買って仮りの住居へ帰った（浜寺の風景）＞

死の包囲の中でむつび合う人の情の極致の一瞬はほのかにあかるい。

明治という日本の過渡期に最も独創的な思想家であった兆民は〝生前の遺稿〟を読書界に爆発的に普及させたことによって、あたかも生きたように死んだ感を与えるのである。

（国則三雄志）

見どころ＝●はりまや橋●高知八幡宮

資料受贈報告（平成十三年六月～十三年八月）

敬称略

▼**今井嘉彦**・「高知ペンクラブ30年」島総一郎編　高知ペンクラブ」▼**武田頴次郎**・「山茶句集　武田山茶　武田頴次郎」▼**井上孝夫**・「新釋正岡子規歌集　橋田東聲　紅玉堂書店」ほか▼**横田晴光**・「三菱王国　上・下　邦光史郎　集英社」ほか▼**藤本綾子**・「映画〈人間の骨〉関係資料」▼**小松勝喜**・「土佐西国観音巡り　小松勝喜　毎日新聞高知支局」▼**壺発行所**・「大河燦々　流曜の会　俳誌『壺』発行所」▼**国見純生**・「歌人回想録　国見純生他　ながらみ書房」▼**大塚忠義**・「づんと行く　門田豊追悼集刊行委員会編　リーブル出版」▼**池川富美子**・「黄木詩集　横山黄木（又吉）　高知新聞社」▼**妻鳥季男**・「倭漢朗詠集　巻上・下　佐佐木信綱編刊」ほか▼**木野ふみ**・「不器用な手品師たち　木野ふみ　編集室きら」▼**渡辺裕二**・「姥捨山の伝説　渡辺裕二　リーブル出版」▼**笹岡由紀子**・「（歌集）朝の露　笹岡雅章　笹岡由紀子」▼**黒岩孝**・黒岩涙香関係資料」…黒岩涙香（周六・一八六二～一九二〇）は文久二年、安芸郡川北村（安芸市）生まれ。父は郷士。探偵小説家・新聞経営者。得意の英語力を生かして明治二〇（一八八七）年頃から翻訳探偵小説を次々と新聞連載、好評を得ました。また、二二年九月に発表された創作「無惨」は我が国最初の探偵小説として文学史上特筆されるものです。二五年一〇月に「朝報社」を設立、新聞経営に乗り出します。「萬朝報」と名づけ

◆◆◆文学館日誌 2001年6月～8月◆◆◆

6月

◆1日 ～大佛次郎賞受賞記念～ 安岡章太郎「鏡川」開催。高知フリースクール高等部14名ご来館。◆3日 「寺山修司展 テラヤマ・ワールド―きらめく闇の宇宙」終了。期間中入館者2377名。入館者層を変えた斬新な企画展でした。◆5日 千葉大学教授 深澤氏ご来館。◆9日 専門講座「近世土佐の文人たち（今村楽）」講師竹本義明氏。文学館ホール。参加者約80名。◆15日 山陽新聞社文化家庭部三上絵里氏ご来館。◆17日 沢田智恵先生、医業福祉専門学校19名ご来館。森祥一県会議員ご来館。◆21日 黒岩涙香のご遺族・黒岩一紘氏、大橋ご夫妻ご来館、涙香資料ご寄贈。◆30日 漢字文化講演会「漢字の成り立ちから見た教育」元桜美林大学教授加藤道理氏、「日本の漢詩 ―そして土佐の漢詩人―」二松学舎大学学長石川忠久氏。漢字文化振興会と文学館共催。詩吟 李白「廬山の瀑布を望む」福永澄子氏、吉村虎太郎「舟出良港に至る」山崎清重氏、尺八伴奏澤田萬山氏協賛。演題他の書を千屋清郷氏に協力いただく。高知城ホール4階 参加者約230名。樋上潔氏（おもちゃ作家）、山本光子氏（人形作家）来館。

6／30

漢字文化講演会での詩吟・尺八の演奏
（尺八・澤田萬山氏、吟詠・福永澄子氏）

6／30

聴衆を魅了した石川忠久先生らの
漢字文化講演会

7月

◆1日 「土佐のむかしばなしと伝説」展開催。8月31日まで。かみしばい劇場「仁淀川民話めぐり」&むかしあそび体験 講師 市原麟一郎氏、高知子どものあそび研究会。文学館ホール。参加者約30名。◆3日 追手前小3、4年生53名ご来館。山梨県立文学館河越雄二様、溝口記様ご来館。◆6日 高知大学付属小48名ご来館。◆7日 畑山重篤氏（四万十大使）ご来館。◆10日 かみしばい劇場「仁淀川民話めぐり」&むかしあそび体験 講師 市原麟一郎氏、高知子どものあそび研究会。文学館ホール。参加者約50名。追手前小5、6年生・障害学級57名ご来館。城東中140名ご来館。◆12日 森林センター局長坂本耕平氏ご来館。◆13日 一ツ橋小60名ご来館。江ノ口小3年生49名ご来館。教育研究所（児童生徒）8名ご来館。◆17日 春野小中障害児学級8名ご来館。◆18日 高知ろう学校17名ご来館。◆20日 かみしばい劇場「仁淀川民話めぐり」&むかしあそび体験 講師 市原麟一郎氏、高知子どものあそび研究会。文学館ホール。参加者30名。◆24日 山本有二氏、嶋岡晨氏ご来館。◆28日 「土佐のお地蔵様めぐり（スライド上映）」講師 市原麟一郎氏。文学館ホール。参加者約15名。

8月

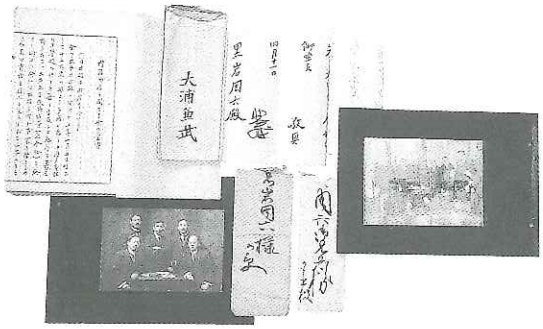
◆1日 かみしばい劇場「土佐のおばけばなし」&むかしあそび体験 講師 市原麟一郎氏、高知子どものあそび研究会。文学館ホール。参加者30名。博物館学芸員実習（高知女子大4名、四国大2名）。5日まで。「スタンプラリー」開始。10月31日まで。◆4日 「土佐のお地蔵様めぐり（スライド上映）」講師 市原麟一郎氏。文学館ホール。参加者約30名。◆10日 かみしばい劇場「土佐のおばけばなし」&むかしあそび体験 講師 市原麟一郎氏、高知子どものあそび研究会。文学館ホール。参加者40名。開館時間延長。15日まで。◆19日 かみしばい劇場「土佐のおばけばなし」&むかしあそび体験 講師 市原麟一郎氏、高知子どものあそび研究会。文学館ホール。参加者50名。◆22日 第四小児童クラブ33名ご来館。◆23日 第4回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査。安芸市民会館。参加者7名。◆25日 「土佐のお地蔵様めぐり（スライド上映）」講師 市原麟一郎氏。文学館ホール。参加者約30名。龍馬学園19名ご来館。岡本弥太の三女岡本璟子氏、四女藤田泰子氏ご来館。岡山県より塩見曠氏ご来館。◆26日 第4回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査。高知城ホール。参加者86名。◆28日 島根県文化振興課長矢内高太郎氏、主幹神在英寛氏ご来館。◆29日 第4回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査。大方あかつき館。参加者50名。江陽小比島クラブ29名ご来館。◆30日 かみしばい劇場「土佐のおばけばなし」&むかしあそび体験 講師 市原麟一郎氏、高知子どものあそび研究会。文学館ホール。参加者約50名。◆31日 「土佐のむかしばなしと伝説」展終了。期間中入館者3436名。

8／23

第四回児童生徒文学作品朗読コンクール
地区審査

られた新聞は、他紙より廉価であることと、簡単、明瞭、痛快をモットーにした魅力ある紙面作りで大衆読者層の支持を受け、たちまち都下第一の新聞としての人気を得ました。また「萬朝報」に連載される涙香の翻訳探偵小説は大変な人気で、単行本としても版を重ね読書界の人気をさらいました。涙香は、生涯にわたって新聞経営に携わり大正九年一〇月六日没。このたびご遺族から寄贈された資料は長年黒岩家で保存されていたものです。賞勲・位記関係（8点）、書簡（9点）、土地家屋等資産相続関係（23点）、萬朝報社関係（26点）、写真（34点）など一三六点となっており、涙香の足跡を知る上で貴重な資料が沢山含まれています。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。



黒岩涙香関係資料（一部）

高知県立文学館ニュース 第十四号 平成十三年十月一日発行 〒七八〇―〇八五〇 高知市丸ノ内一丁目一番二〇号 電話〇八八―八二二―〇三二一 FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2001年

10～12月

10月――October　11月――November　12月――December

ミニ企画

ミニ企画展 **岡林清水展** ＜期間＞10月20日(土)～1月6日(日)　＜場所＞常設展示室ミニ企画コーナー他

文学を中心に高知文化の発展に大きな業績を残された故・岡林清水先生（平成10年8月21日没）を偲び、その人と仕事を振り返る。文学館の開設にあたっても力を尽くされた。

催しもの

【第28回俳句展】 10/24(水)～11/1(木)　最終日は正午まで

（高知県俳句連盟・高知県立文学館　共催）
於：文学館ホール　入場無料

高知県俳句連盟と文学館の共催で俳句展を開催します。特別展示コーナー「大西昇月コレクション－現代俳句の人たち－」（色紙、短冊など）を設ける予定です。

〔第4回文学カレッジ〕
多彩な講師陣により土佐の文学にふれていただきます。
申込受付10月31日まで

- ●第1回・11/10「土佐日記」を読む　渡辺輝道氏
- ●第2回・12/8「一年有半」を中心に　猪野　睦氏
- ●第3回・1/12「野中兼山とお婉－大原富枝のお婉」　山川禎彦氏
- ●第4回・2/9「高知の詩人たち」　小松弘愛氏
- ●第5回・3/9「科学随筆を探る－寺田寅彦の作品から」　上田　壽氏

【第4回児童生徒文学作品朗読コンクール】

文学館では、朗読を通して文学に親しむこどもたちを育てたいという願いから、朗読コンクールを開催しています。
地区審査を経た人たちによる県審査会です。

◆県審査（公開）
＜日時＞　11月11日(日)午後1時～　於：文学館ホール
（最終審査後に記念講演会、表彰式）

■記念講演会
「ことばは魔法」講師：角野栄子先生
（「魔女の宅急便」作者、児童文学者）

企画展示室

山内一豊入国400年共同企画

土佐山内家宝物資料館主催・企画展

「近世大名の誕生－山内一豊　その時代と生涯」
9月29日(土)～11月4日(日)　於：企画展示室
＜料金＞一般　400円（割引手形をお持ちの方は320円）、高校生以下　無料
※山内宝物資料館主催の企画展のため、文学館常設展をご覧になる方は別途料金（一般350円）が必要となります。

■講演会・座談会（定員100名）
＜日時＞10月6日(土)13時半～16時半　於：文学館ホール
◇講演・「関白と大名」三鬼清一郎氏（神奈川大学教授）
◇座談会・「海からみた国主交代」秋澤繁氏（前高知大学教授）、三鬼清一郎氏

■学芸員講座（定員100名）
＜日時＞10月20日(土)　14時～16時　於：文学館ホール
◇「一豊をめぐる諸問題－豊臣政権との関係を中心に－」
行藤たけし氏（山内宝物資料館学芸員）
※講演会、座談会、講座への参加をご希望の方は、山内宝物資料館（088-873-0406）へお問い合わせください。

高知県立文学館秋季企画展　山内一豊入国400年共同企画

■「おあん、婉、お馬…土佐の近世の女性と文学」
11月22日(木)～'02 1月6日(日)
＜料金＞一般　550円（割引手形をお持ちの方は440円）
高校生以下無料（常設展を含む）

大垣城での関ケ原の戦いを語り伝え、その後土佐へ来国した山田去暦の娘おあん、父・野中兼山の娘として誇り高く生きた婉、僧純信との恋にかけ国抜けをした幕末庶民の娘お馬。彼女らを中心に、土佐の近世の女性と文学を紹介。

■記念講演会（定員120名、入場無料）
12月9日(日)　10：00～12：30　於：文学館ホール

「おあん物語とその絵巻の魅力」
早稲田大学教授　桑山　俊彦　氏

「野中婉、その誇り高き半生」
土佐史談会副会長　依光　貫之　氏

参加ご希望の方は、〒住所・氏名・TELをご記入の上、県立文学館12／9講演係までハガキで、または館受付でお申し込み下さい。入場整理券をお送りします。定員に達したら締め切ります。

【休館日】10月――9, 15, 22, 29日　11月――5, 12, 19, 26日　12月――3, 10, 17, 25～31日

次回特別展予告 **巴里憧憬－日本人文学者のフランス体験－**　平成14年2月8日(金)～3月31日(日)予定

1862年春、徳川幕府の使節団が、巴里の地を踏んで以来、約140年。その間、巴里という異国の都は、文学・美術・ファッション・料理などの幅広い分野で、近代以降の日本人達を魅了し続けてきました。
今回の企画展では、日本人にとって「異文化体験とはなにか」真摯な近代日本人文学者たちの問いかけを、日本近代文学館の貴重な文学資料を中心に考えてゆきます。

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は、午後4時30分まで）

休館日　毎週月曜日（休日・祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月26日～1月1日）

観覧料　一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県（市）長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。

駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内

- ●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- ●JR高知駅下車徒歩20分
- ●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- ●バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850